

序

近年はICUでもチーム医療の構築、連携が重要であることは論をまちません。集中治療医が主治医であっても現場で実際に患者に最も張り付いているのは看護師であり、そこに肺理学療法や呼吸療法、栄養管理、リハビリテーション、などのさまざまなチームが次々に関与することで人工呼吸器管理からの早期離脱や早期離床も促進されます。それらの連携が良好な患者の予後に繋がることが期待されています。

一般的にICUでは集中治療医は指示書で指示を出します。そのうえで適宜コミュニケーションを図りながら病態解説、治療方針などを看護師に口頭で伝えます。また、場合によってはわれわれの知らない情報や密に患者に接しているからこそ得られる情報を看護師から逆に伝え聞くこともあります。

実際にICUで連日、看護師と仕事をしていくなかで、医師サイドから看護師に伝えたい、お願いたいささやかなケアや管理、要望が多いことに気付きました。当然ながら多くの施設では医師と看護師の間で適宜カンファレンスが開かれ、お互いの意思疎通を図る努力や工夫がなされているとは思います。その経験を踏まえて従来のICU看護の医学書に、もう少しだけ、医師からのお願い、メッセージを組み込んでみても面白いのではないかということを感じました。

本書ではICU患者のケアに加えて、ICU看護師に特化した業務や多職種との連携、チーム医療、医療安全に関する項目にも多くのページを割きました。読みやすさを重視して各項目を見開き2ページで統一することにも強くこだわり徹底しました。本書一冊で広いICU領域を可能な範囲で最低限網羅したつもりです。勿論、各項目に関する詳しい専門書や特集号などの看護雑誌は豊富にありますので適宜それらを参照していただければと思います。

ICU看護は一般病棟での看護に比べて特殊性があるのは事実です。あらゆるモニターや医療機器に囲まれて、場合によっては分刻みに病態が変化する患者もいます。このような日進月歩の高度なICU領域ではありますが、それを支えるのは人間味あふれる看護師のみなさん各自のホスピタリティだと思います。

どの世界でも物事はパーフェクトには進まないものです。しかし、重症患者をICUで管理、看護する立場にいるからこそ、常にパーフェクトな看護を目指す使命がICU看護師にはあると考えます。

最後に本書の企画、刊行にあたり多大なご尽力を頂きました羊土社編集部の山下志乃舞氏、関家麻奈未氏ならびにスタッフの皆様に厚く御礼を申し上げます。

2013年2月

編者を代表して

さいたま赤十字病院救命救急センター

清水敬樹